

知の戦いを考える —坂本先生の2つの思い出—

勝 俣 誠
(PRIME 客員所員)

モノ・コトを目先の効用や時代の空気で判断してしまい、じっくり考えることを許さない反知性主義の到来を予感させる時代にあって、私は、昨年退職した明治学院大学（明学）国際学部と同大学の国際平和研究所で、同僚から多くのことを学んだ。

坂本先生もその一人であった。私がいた学部では、すべてのメンバーは「さんづけにしましょう」という同僚もいたが、本稿では、でもやはり坂本先生はやはり坂本センセイと呼ばれたいと思うのが今である。坂本先生の2つの思い出を記したい。

1. アパルトヘイトと先生

まず、坂本先生が明治学院大学に来られる前の思い出である。

私が坂本先生を知ったのは、国際平和についての彼の著作で、確か、私の大学院生時代であった。そして、私は先生の入門書を読んで、お手紙を書いたり、沖縄での平和学会の際、同じ飛行機に乗り合わせたりしたくらいで、直接言葉を交わす機会はなかった。折しも南アフリカ（南ア）では、アパルトヘイト体制が差別撤廃を求める内外の圧力で、未曾有の危機を迎えていた時代であった。アフリカやヨーロッパ、北米で出会った反アパルトヘイト運動に携わる市民からは、なぜ日本は南アの白人政権と密接な経済関係を持ち続けている

のか、としばしば問い詰められた。私は、東京をベースに、反アパルトヘイトの市民運動にささやかながら参加した。

欧米日政府は、南アにおける1980年代後半のアパルトヘイト廃絶への関与について、きわめて慎重な態度を示した。南アの白人政権は、冷戦下、西側の一員としての忠誠を示していたし、また、資源大国アフリカのビジネス上の魅力が加わっていたからである。

アパルトヘイトへの批判を建て前としながら、白人政権を実質的に追い込むことになる行動には消極的となる欧米日政府に対し、世界の反アパルトヘイト運動は、国連憲章第7章に匹敵する強力な経済制裁を白人政権に課すよう各国政府に働きかける活動に焦点を絞っていった。また、南アから輸入されるレモンやリンゴジュースなどの不買運動も日本で行われていた。南アの反アパルトヘイト組織は自国への経済制裁は確かに黒人の生活を苦しめるが、アパルトヘイトをなくすためにはその痛みを耐えるから実施してほしいと訴えていた。

しかし、日本での国際問題の研究者の反応は今ひとつであった。欧米のリベラルなメディアも国連憲章第7章型の経済制裁には及び腰であった。冷戦思考に凝り固まっていた政治学者は、南アの白人政権は強固なものなので、21世紀になっても生き残るなどと説明し、アパルトヘイ

ト体制即時撤廃を求める世界の市民運動がみせる「ナイーブさ」を、揶揄する向きさえあった。

「テロリスト」のレッテルを貼られ収監されていたネルソン・マンデラは、武力闘争を放棄しないと獄中で誓っていたため、アムネスティ・インターナショナルも、マンデラを「良心の囚人」として支援できなかった。反アパルトヘイト運動の中心的団体の一つ、アフリカ民族会議（ANC）も南ア国内で南ア共産党とともに非合法組織であった。また、ANCのメンバーではないが、黒人組織運動のリーダー、スチーブ・ピコは1970年代すでに南ア国内の白人リベラルがいかにアパルトヘイトを具体的になくすことの戦いに無力であったかを見抜いた知識人の一人であったが、彼は1977年に白人当局の拷問で殺されてしまった。

こうした時代文脈の中にあっても、黒人主導の反アパルトヘイト運動の主張に謙虚に耳を傾けるよりも、欧米のいわゆるリベラル知識人の動向を追う方に日本の知識人は熱心だったのかもしれない。

そんな日本の知的状況の中で、坂本先生は自らアパルトヘイト下の南アを訪問し、経済制裁は今必要であると、はっきりと発言した（朝日新聞夕刊1986年8月1日）。

この明確な立場表明は、私だけでなく、反アパルトヘイト運動に携わる日本の市民運動の多くの人にとって大いに励ましとなったと思う。

そして、その後明学に来られた際も、まだアパルトヘイトは終わっていなかったのも、この国の先行きを案じて、何とかしなければならぬとわざわざ自宅にお電話を頂いたこともあった。

国際政治問題を巧妙に解説するのは誰にでもできるが、アパルトヘイト体制のような人間の尊厳に関わる時事問題に対して、当時ラジカルとしばしば見なされた強力な経済制裁を支持した坂本先生は忘れられない知的存在であった。

2. 農と先生

もう一つの思い出は、食べモノづくりである。

私はある時から、現代世界の人間の自由ないし自律とは、市場を介さないで生命の再生産を可能にする食料の獲得手段の確保という営みから考えるべきではないかと思うようになった。アフリカの農村を訪れて、市場とは遠い村落で立派に生活している人々に会うことができたせいかもしれない。

西アフリカ滞在を終えて数年たった1988年、横浜市の戸塚に新たに発足した明学国際学部が2年目を迎えた年、私は国際政治学の坂本先生と精神分析のやはり今は亡きなだいなださん（堀内秀さん）とともにこの学部に着任した。

横浜市の丘陵を切り拓いて建てられたキャンパスに着任するや、通勤・通学の観点からは不便に見える同校舎の地理的条件を何とか活かしたいと考えた。結果的に、ゼミ生とともに借りた市民農園で野菜づくりを始めることにした。私は、キャンパスと、隣接する住宅地の中にある家庭菜園とを、クワなどを持ってよく往復した。

ゼミ生との下素人のコメづくり、野菜づくりの意味がよく分からない同僚もいた。ひたすら経済効率ぐらいにしか関心がなく、人口増加の道をたどるアジアの現実から、有機農業など夢物語と考える同僚からは、収量はどのくらいかと聞かれた。そんな時、作付面積も、収穫量も一度たりとも計測したことのない私は困ってしまった。

しかし坂本先生だけは、高度成長期を経えますます命についてのリアルな感覚が見えなくなる危機感の中で、農業でなく今流で言う「農」の体験が人間の命に関わる営みとしての尊さを持つことを、見抜いていたのではないかと思う。畑帰りに横浜キャンパスですれ違ふと、坂本先生は立ち止まり声をかけてくれた。

昨年、結局最後になってしまった先生からのメールでも、私とゼミ生とのナスづくりに触れ、

「自分はいつも好感をもっていた」と思い出を書かれていた。

理論構築によってだけでなく、命の尊さを、何よりも身体感覚で自らの語彙の中に刻み込んでいくことは、国際平和を研究する者にとってきわめて重要なことだと私は思う。

過去70年間、日本は外国と戦争をしてこなかった。今ではかつての戦争現場をリアルな感覚で想像できる戦前・戦中を生きた人々はどんどん減ってきている。

戦時体験とは、戦場での兵士や住民の死体や負傷者、日本国内での食糧不足やヒロシマ・ナガサキを含む空襲による人的被害など多岐にわたる非日常的情况の総体である。

戦争をしないための学問領域である平和学ないし平和研究も、戦時の非日常的情况についての鋭い想像力に裏づけられてこそ、説得力を持つ。

私自身は戦後生まれである。いや、敗戦直後の生まれと言った方がいいだろう。東京新宿の焼け野原で辛うじて空襲を免れた家で幼年期を過ごした。戦地から帰ってきた人々や国内のモノ不足の苦労談をよく聞く機会があったが、戦争をしないために、人類は知恵を出さなければいけないと実感するようになったのは大分後になってからである。とりわけ、1960年代のベトナム戦争を、テレビなどで目のあたりにするようになってからである。

これに対して、坂本先生は終戦後の食糧難を日本国内で体験なさっていた。戦争中の食べモノづくりの思い出を少なくとも2回ぐらいはお聞きしたと思う。近所の農家から肥溜めを借りて、2年ほど、それを担ぎ「農民生活」をなさった時の話だ。ムギと陸稲（おかぼ）は失敗したが、野菜・イモ類は成功したとのことだった。

そして、今思うに、人間の生命の再生産を支える食や農についてのこのリアルな体験が、明治学院大学での2013年11月の講演「“いのち”を生か

す、たたかいの研究」にも反映されていたのではないだろうか。

その中で坂本先生は、社会科学としての国際政治学の従来の枠組みを超え、あえて世界だけでなく地球という自然科学のコトバを使用した。人類とそれがよって立つ自然環境の双方の生き残りを語るとき、平和研究とは単にいかにして戦争を避けて、実をとるかといった狡猾・巧妙な関係性の解説にとどまらないことを、私達に示唆しているようである。命の尊さから、現代世界の平和と戦争をもう一度考え直そうというメッセージに、私には聞こえた。

すなわち核戦争を回避する方法を考える時、何よりも、被爆者の原体験から放射能による取り返しのつかない身体の破壊・破損を直視することである。また、地球温暖化の危機に関しては、生存を保証する食と農を改めて再評価する知的作業である。

3. 知によって闘うこと

日本の近現代史において知性が問われるとき、何よりも過去の東アジアの戦争に対して知識人がどう振る舞ったかが問題とされる。そして、戦後70年の今日、よって立つ知性とは何かを、日本の知識人は正面から提起されていると思う。

実際日本は今日、東アジアでの軍事衝突の危機だけでなく、米国主導のテロとの戦いという冷戦後の新たな世界秩序の形成への積極的関与を迫られている。

こうした中で、どうしたら東アジアに戦争回避の条件をつくり、「テロとの戦い」というグローバル化した敵対関係軸を非軍事的解決策に埋め込むことができるのか、それを日本の知識人は問われている。

やはり明学最後の講演で先生は「明日最後の時が訪れても、私はリンゴの種をまき続ける」と言われたが、私は即座に南フランスの作家、ジャ

ン・ジオノの小説「木を植えた男」を思い出した。この原題からするとむしろ「木を植え続けてきた男」とすべきだが、荒れた山に森を再生させようと植林を続ける主人公は人類生き残りの条件を考え続けた永遠の学徒、坂本先生と重なった。

私も永遠の学徒としてできることを続けたい。そしてド素人としての「農の営み」を捨てず、山村にブナの木を再生させたい。

付記

国際政治経済学、とりわけ現在アフリカ地域に

関心のあった私は平和学ないし平和研究という学問分野に正面から向き合ってこなかった。しかし思えば1980年代後半明学に来られた坂本先生の国際平和研究所の所長時代に国際研究プロジェクトのメンバーに誘われて現代世界で平和とは何を意味するのかを考えだした。以降政治学をはじめ、経済学、社会学、法学、歴史学、文学、宗教学などの人文・社会科学、さらには自然科学の同僚研究者と世界の市民運動家に会い平和と暴力について多くを学べたのはこの研究所だった。